様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 １ 日現在

機関番号：３２６１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３２３０

研究課題名（和文）若者は「アジア人」になれるか：日本人のグローバル化志向に英語圏アジアが果たす役割

研究課題名（英文）Can the Young People Be "Asian"?: The Roles that English-speaking Asia Plays in Japanese People's Self-Globalization

研究代表者
加藤　恵津子（Kato, Etsuko）

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：１０３４８８７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：英語圏アジアの代表国シンガポールで、20～40代前半の日本人一時滞在者41名、シンガポール人22人にインタビューを行い、その「アジア」観の比較を行った。日本人はシンガポールで「アジア」と「アジア人としての自己」に初めて出会い、「日本VS西洋」の二項対立を脱する世界観を得たと自己肯定的に語る。対してシンガポール人は、「アジア」というカテゴリーにほぼ何の意味も見出さず、むしろ政府主導の言説として警戒・揶揄する。日本の若者にとって「アジア」は、想像上の連帯感と、西洋を相対化する視点を与えるものだが、その西洋志向がなくなるわけではなく、「アジア人」は一時的にカスタマイズされたカテゴリーと言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義
グローバリゼーションが叫ばれるも変化の少ない日本社会において、若者の外向き志向は貴重な現象である。また新しい世界観の獲得は、個人の人生を豊かにする上で重要である。本研究は、英語圏西洋で挫折し、英語圏アジアに移動した個々の日本人にとって、「アジア」との出会いが持つ意味をミクロな視点から調査すると同時に、英語圏アジアの先進国シンガポールから日本社会が学べるものをマクロな視点から調査し、日本社会の「外向き志向」を支える。また「アジア」を、言説上・想像上のものとして扱う「アジア主義研究」を進めつつ、植民地主義的態度を克服するためにも、「アジア」概念を慎重かつ積極的に利用することの重要性を主張する。

研究成果の概要（英文）：In Singapore, a representative state of English-speaking Asia, the author conducted interviews with 41 Japanese temporary residents and 22 Singaporeans in their 20s to early 40s, in order to compare there vies on "Asia". The Japanese interviewees relate self-affirmatively their experiences of encountering "Asia" and "Asian self" for the first time in Singapre, and their new world view that relativizes the "Japan-West" dichotomy. Meanwhile, Singaporean interviewees find almost no meaning in the category "Asia", but are rather critical of their government's political discouses making use of it. While "Asia" gives to the Japanese young people imagined solidalities and relativisit world views towards the West, they are none the less free from West-oriented attitudes. For them, "Asian self" is a temporary and customized category.

研究分野：文化人類学

キーワード：アジア　英語圏　若者　日本　シンガポール　アジア主義　自己　世界観

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

本研究は、若者研究、移民研究、そして文化心理学を交差させようとする試みである。本研究はまず、若者研究と移民研究の融合を目指した前科研費プロジェクト（2011～2013 年度）の発展的継承である。前研究では、「やりたいこと（仕事）」を探して 30 歳前後で職を辞し、カナダとオーストラリアに渡る日本人の若者たちのへの現地調査を通して、若者の「内向き志向」を批判する言説に異議を唱えた。また日本在住の若者一般への統計調査からも、若者らを特に「内向き」と断定する要因は見つからなかった。むしろ問題として浮かび上がったのは、若者の辞職や海外渡航に対し、ネガティブであれポジティブであれ、過度に意味を読みこむ日本社会自体の「内向き志向」だった。また「グローバル人材」への誘いは高学歴の男性、「自分探し」への誘いは非高学歴の女性に典型的に向けられるなど、若者の海外渡航やそれを促す言説には、ジェンダー・階層が深く絡んでいた。

日本社会よりも、個々の若者たちの方がはるかに早くグローバル化している現状は、日本の若者研究と移民研究をより密接につなげる必要性を筆者に感じさせた。さらに筆者は、自身が持っていた「若者のグローバル化＝英語圏西洋への渡航」という思考の限界を感じた。確かに、フィールドで出会う日本の若者たちは「海外＝英語圏西洋」という図式を持っているが、「アジアで働く」ことを誘う日本企業の言説も若者たちを取り巻いている。英語圏西洋でうまく人生が展開しない若者は「仕事があれば行ってもいい」地として「アジア」を語る。日本の若者は、英語（圏西洋）を通して「アジア」に出会う機会が多いと言える。

こうして再会・または再発見される「アジア」は、地理学的区分としての「アジア」とも、日本から見ていた「アジア」とも異なるはずである。さらに若者たちの語る「アジア」から日本がほぼ常に除外されていることからも、「アジア」は、英語圏西洋でも日本でもない、想像上の第三の場所であると言える。そうであれば、「海外」で仕事や生活をしたいが、英語圏西洋に受け入れてもらえない日本人の若者にとって、「アジア」は、「日本 VS.西洋」の古典的な二項対立から脱しつつ、新たな自己像（アジア人、国際人、グローバル人材等）や仕事、人生の獲得が期待される場となりうる。

次に、本研究は文化心理学とも交差している。文化心理学では、北米と西ヨーロッパでは「相互独立的自己観」が、アジア、アフリカ等では「相互協調的自己観」が形成されるという。だがこの議論は「アジア」内の文化差を不可視化してしまう。特に英語を公用語とし、多民族の利害がぶつかりあう「英語圏アジア」の国々の人の自己観が、日本育ちの日本人と同じ意味で「相互協調的」であるとは考えにくい。英語圏西洋を経て「アジア」に暮らす日本の若者の目に、現地の人々は、この二項対立モデルに照らしてどのように見えるのだろうか。またもし「日本人」とは異なる「アジア人」としての自己認識を持つようになったという若者がいれば、その人は二項対立を超える新しいモデルを体現しているのかもしれない。

以上の関心から、本研究ではシンガポールをフィールドとし、「英語圏西洋」での一時滞在を経てこの地に来た日本人の若者が、「アジア」との再会をどのように意味づけ、自己や人生をどのように（再）構築していくかを探る。シンガポールに注目する理由は以下のとおりである。1）イギリス支配の歴史を持つ英語圏のため、「英語を使いたい」日本人の若者を惹きつけやすい。２）近隣アジアの先進国の中で、2010 年頃までもっとも積極的に日本人労働者を受け入れていた国であることに加え、日本企業がオセアニア進出のための拠点を置く国であることから、日本人の求人も多く、豊富なインタビュイー数が期待できる。３）政府主導で急速に先進国化した、「凝縮された近代」を体現する同国は、日本の人材政策のあるべき姿を考える試験場となる。国際的な人材獲得競争において、日本の「グローバル人材」政策を極端にしたような同国のエリート主義（学歴・英語重視主義）が、日本の若者たちにどのような機会や自己認識を与えるかは注目に値する。

２．研究の目的

①当初の目的：30 歳前後で日本での就労を離れ、「英語圏西洋」（アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリア等）での英語学習や一時労働を経て、「英語圏アジア」（シンガポール）に一時滞在中の日本人の若者が、「アジア」や「アジア人としての自己」にどのような意味を（再）付与し、どのように人生の展望を（再）構築するかを探る。

②調査中に追加した目的：シンガポール人の「アジア」観、世界観、自己観の調査、および日本人との比較。日本人インタビュイーと同世代（20～40 代前半）のシンガポール人は、どのような「アジア」観を持っているのか。それは日本人インタビュイーの持つ「アジア」観と、どのようにズレているか。政府の政策や言説（「アジア」の強調、英語至上主義、多人種主義、華人中心主義など）は、シンガポール人の「アジア」観、世界観の形成にどのていど影響を及ぼしているのか。シンガポール人の「アジア」観において、日本はどのような位置を占めるのか、またその世界観において、英語圏西洋（旧宗主国イギリス、今日の大国アメリカ、地理的に近いオーストラリア）はどのような意味を持つのか。シンガポール人は、英語が母語であることと、地理的に「アジア」と呼ばれる場所に出自を持つことを、自己の

内面においてどのようにバランスを取っているのか。これらの考察から、日本の目指すべき方向についての（反面教師をふくむ）ヒントを発見したい。

３．研究の方法

①当初の計画：１）「英語圏西洋」での留学・就労経験を持つ日本人一時滞在者へのインタビュー、２）彼/女らの行動圏（衣食住、仕事、交流）の参与観察、３）彼/女らを取り巻く専門家たち（就労・移民・留学サポート産業、医師・心理カウンセラー、日本人会や商工会）へのインタビュー・意見交換、４）シンガポール国立大学の研究者らとの意見交換、５）現地メディア（日本語情報誌、ウェブサイト等）の分析、６）同国の人材政策についての情報や研究文献の収集を行う。二年目以降は、一時滞在者たちの行動圏として近隣諸国（マレーシア、タイ、ベトナム等）も積極的に視野に入れ、インタビューや参与観察を行う。

②調査中に追加した研究方法：１）日本人インタビュイーと同世代のシンガポール人をインタビューする。２）シンガポール政府の「アジア」「多人種主義」についての政策・言説を、街なかでの参与観察を通して考察する。

４．研究成果

①日本人・シンガポール人インタビュイーの背景：

日本人一時滞在者インタビュイー（シンガポールの対岸マレーシア、ジョホールバル市在住者を含む）の数は、最終的に 41 人となった（当初の目標は 50 人）。その過去の滞在国を見ると、英語圏西洋が過半数を占めるものの、華人国家（シンガポール、中国、香港、台湾）を経験した者も 13 名と、予想外に多かった。いっぽう南アジア・東南アジア滞在経験者は１名のみだった。

シンガポール人インタビュイー数は、22 人に及んだ。募集は現地の人脈（シンガポール人、日本人）を通して行い、「海外経験のある者」という条件を付けた。インタビュイーには、ある種の偏り―華人系（人口の 7 割を占める）、日本に興味や好意を持つ―が生じた。しかし、職業や学歴における多様性（個人事業主、アーティスト、職業軍人、研究者、NPO 運営者、専業主婦など）は確保できた。金融、IT、運輸業が盛んなシンガポールだが（日本人一時滞在者の勤務先としてはそれらの業種が目立つ）、現地人インタビュイーには、そのような仕事に就く者が少数派だったこと、また必ずしも学歴エリートばかりでなかったことで、ステレオタイプとは異なるシンガポール社会を把握できた。過去の滞在国はオーストラリア、アメリカ、イギリスといった英語圏西洋が目立つが、ドイツ、香港、日本での滞在経験を持つ者もいた。

②　日本人一時滞在者についての、当初の疑問への答え：インタビュー結果より

調査開始時に挙げた四つの大きな問い（以下１～４）に沿って、インタビュー結果をまとめる。

１）英語圏西洋から英語圏アジアに移動した日本人の若者の背景にある、動機・事情は何か。

予想通り、英語圏西洋での就職やビザ延長ができなかった、等の消極的な理由が大多数だった。ほとんどの人が「アジア」にはもともと興味がなく、「英語」または海外で仕事ができる、求人があるのがここしかなかったという理由で、偶発的にシンガポールに渡航していた。

２）「アジア」というくくりが英語圏志向の日本人の若者に対して持つ意味は何か。英語圏西洋も経験した若者にとって、それは「日本 VS.西洋」という二項対立的思考を脱するきっかけになるのか。

多くのインタビュイーが「シンガポール」を「アジア」とほぼ同義に語り、かつ「アジア」をきわめてポジティブな意味で使う。「アジア」を「（馴染みある）食」「（聞き取りやすい）アジアの英語」「温かな人間関係」によって特徴づけ、特に「アジアの英語」に関する感動を異口同音に語る。対照的に「（聞き取りにくい）アメリカ英語」「（ビジネスライクで差別的な）欧米の人間関係」へのトラウマを語る者が多い。英語圏だが差別されない環境に来て初めて、これまで同化しようともがいていた欧米が、自分にとっていかに過酷な場所だったか、自分がいかに西洋（正確にはアメリカ）中心主義だったかに気付いたかのような語りが目立つ。この意味でシンガポールが体現する「アジア」は、日本人インタビュイーにとって、「日本 VS.西洋（アメリカ）」という二項対立的思考を脱する場であると同時に、トラウマ治癒と自己肯定のためのセラピー的な場である。

３）日本人の若者は「アジア人としての自己」を持つことができるか。それは「日本人としての自己」とどのような関係にあるのか。またそれは西洋志向とは違う形で、若者たちの「外向き志向」を促すことになるのか。

シンガポールの日本人インタビュイーの多くは、「アジア人」という語で自分を語ることに躊躇がない。これは筆者がカナダやオーストラリアでインタビューした日本人一時滞在者が、自らを「アジア人」と明言することはなく、それでいて中国系、韓国系との交わりの中で、実践的・戦略的に居場所を見出していた―「アジア（人）」は、隠れたカテゴリー（covert category）だった―のと対照的である。「アジア人」は明らかに、シンガポールに来て新たに獲得された、

明示的（overt）で自己肯定的な、しかも西洋人ではない人々との想像上の連帯を生むカテゴリーである。

さらに正確には、シンガポールで日本人が体験するポジティブな「アジア」には、「東南アジア的（Southeast Asian）」と「華人的（Chinese）」の二種類があり、それらは別ものとして語られることもあれば、重複して「アジア的」と表現されることもある。

これらの「アジア的」要素に対し、「日本的」「西洋的」なものはネガティブに語られる傾向がある。特に「日本的」は、非合理的な上下関係や長時間労働、厳格、服従といった「日本の会社文化」と結び付けられ、批判される。また先に述べたように、「西洋的」は、「聞き取りにくい英語」「ドライな人間関係」という要素を選んで語られやすい。よって、日本に見切りをつけ、かつ西洋にも恒常的な居場所を得られなかった日本出身者にとって、「アジア」は、西洋に同化できずとも「外向き志向」でい続けるために有益なカテゴリーである。

ただし、ここでいうポジティブな「アジア」には、きわめて限定的な意味しかない。「シンガポール＝アジア」と捉えている日本人インタビュイーは、東京に勝るとも劣らないシンガポールの都市性、国際性、先進性、利便性を通して経験するもの（のみ）を「アジア」と呼んでいるのである。その証左に、シンガポールで生涯を過ごしたいとか、次は他のアジア諸国で働きたいという者は、インタビュイーの中ではごく少数である。現地の大手日系人材会社にインタビューしても答えは同様で、理由は「（シンガポールで手に入る）生活レベルを落としたくない」からである。いっぽう、次に働きたい場所として再び北米やヨーロッパが言及される傾向にある。つまり、「アジア人」という新たなカテゴリーを得たとしても、それは再び西洋で働くための自信を取り戻すための、個人の成長譚の中でカスタマイズされた、一時的なカテゴリーである。そして日本の若者から西洋志向が消えるわけではない。

４）シンガポールという、エリート主義的人材政策を取る国家は、日本の「グローバル人材」政策に何を教えるのか。

これについては、シンガポール人へのインタビュー結果の分析の後に述べる。

③　シンガポール人の「アジア」観、世界観、自己観：追加インタビューの結果より

シンガポール人インタビュイーの「アジア」観は、日本人のそれとはまったく異なる。シンガポール人は「アジア」というカテゴリーにほとんど意味を見出さないどころか、「アジアの一部としてのシンガポール」の強調を、「政府が作った言説」だとして、冷ややかな目を向ける傾向にある。英語圏西洋で暮らした経験のある者も、「アジア人（ないし中国人）」として現地人から一方的にくくられた経験はあっても、自らを「アジア人」として意識したことはない、と口をそろえて言う。彼ら・彼女らの自認は「（華人系）シンガポール人」である。このことは、1965 年の建国依頼、イギリスをはじめとする西洋への対抗言説として「アジア」を絶えず必要としてきたシンガポール政府の思惑が、市民には内面化されていないことを示唆する。むしろ、日本人一時滞在者の方が、シンガポール政府の言説に感化されていると言える。

さらにシンガポール人インタビュイーには、英語圏西洋に同化したいという願望を持っている様子はない。アメリカやイギリス、オーストラリアへの留学は、キャリア形成や人生の立て直しのためのありふれたステップである。同時に、中国本土や ASEAN 諸国に対しても、思い入れや連帯感を示す者は少ない。その関心はむしろ、中国本土や他の ASEAN 諸国の人々と自分はどこが違うかにある。つまり、もとより国民が「四つの人種」（中華系、マレー系、インド系、白人系含むその他）から成るとされる上、近隣アジアから多くの一時労働者（日本人もその一つ）を受け入れることで成り立っているシンガポールは、わざわざ強調しなくても「アジア的」かつ「多人種的」なのであり、その日常は、シンガポール人に何らの特別な感情を引き起こさない。また、主要な学校教育をすべて英語で受けて育つことから、英語や英語話者、英語圏西洋に対する特別な感情も示さない。

いっぽう日本については、その文化・言語・商品に対する関心や、こうした分野で「西洋に対抗する・または西洋とは異なる世界を見せてくれる国」として期待を持つ傾向にある。しかし日本を、政治や経済のモデルまたはリーダーとして期待する様子はない。日本企業の長時間労働、上下関係、ジェンダー不平等、電子化の遅れといった非合理性は、シンガポール人から見れば悪名高い、魅力ないものである。いっぽう、都市国家に住み、死ぬまで自力で生活費を稼ぐことを政府から奨励されているシンガポール人たちにとって、日本の魅力は「田舎がある」「お年寄りがのんびり暮らしている」ことでもあり、「退職後は日本で暮らしたい」というインタビュイーもいる。現地テレビに登場する日本の番組も、「ローカル線の旅」のようないわゆる「癒し系」である。かつて、高度経済成長のさなかの日本人にとって、東南アジアは「癒しの楽園」という幻想の対象であった。今日、「アジア経済のハブ」となったシンガポールから、日本は癒しとエンターテインメントの楽園として欲望のまなざしを向けられているのである。

④ シンガポールのエリート主義的人材政策が日本の「グローバル人材」政策に教えるもの

シンガポールが日本に教えるものは多い。国土が東京 23 区程度しかなく、自然資源(natural resource)がなく、都市のみからなる島国は、日本（または東京）の特徴を極端にしたような、実験的な場である。母語としての英語教育に見られる、全国民に「外向き」であることを強要する人材（human resource）育成、および外国資本と外国人労働者に頼らざるを得ない点で、シンガポールは文字通りの「グローバル人材」国家と言える。振り返って、日本の 1980 年代の「国際化」や 2000 年代の「グローバル人材」の掛け声が、日本社会にほとんど何の変化ももたらしていないのは、日本において英語を習得することや外国資本・外国人労働者に頼ることが、死活問題というほど重要ではないことの証左である。

だが、自国民も外国人も徹底して「人材」扱いするシンガポール政府（国自体が「シンガポール株式会社」とも揶揄される）の姿は、功利主義的人間観の限界をあぶり出す。シンガポールの無駄のない人材育成は、エリート主義と抜きがたく結びつき、かつそれは人種/民族間の序列にも結び付いている。たとえば同国の教育制度では、中学校修了時の成績により、大学進学者から職業訓練を受ける者までを進路づけする。このとき華人は、政府によって人口のマジョリティを占めるよう調整されている上、子供に高い教育費をかけるため、結果として高学歴層、ひいては社会の上層を占める。何人かのシンガポール人の語りには、こうした階層的な人間観にたいする反発が見られる。たとえば「日本に行ったら、日本人は好きなこと、やりたいことをしていた。そういう生き方もあるのだと知った」「シンガポール人は金儲けばかり気にする」と語るシンガポール人（芸術家、ゲーム作りの好きな人など）がいる。筆者は、カナダやオーストラリアの日本人一時滞在者が、現地人の自由な生き方を称揚し、それに比べて「好きなこと・やりたいこと」ができない日本社会の窮屈さを嘆く語りをいやというほど聞いてきたので、日本人の「自由さ」を羨むシンガポール人の言葉は新鮮であった。

誰にとっても「隣の芝生は青い」のは事実である。だが、日本に輪をかけて「我が国はグローバルな経済競争に勝てる国でなければならない」「そのような国づくりに貢献できる人間ほど有用である」との価値観が支配するシンガポールは、それとは異なる生き方を求める人間にとって、日本以上に生きづらい場所のようだ。芸術活動、ゲーム作りを愛する者は、それがグローバルな競争に有益だからするのではなく、それをせずにはいられないからするのである。その中から、国境を越えて愛される作品や商品が誕生し、結果として国益になることもあれば、国内のみであっても人々の生活を豊かにすることもある。「人材」という語が、人間が本来もつ豊かさの軽視や無視につながらないよう、成熟した国は注意しなければならない。

いっぽう、シンガポールからポジティブに学べることがある。「アジア」というカテゴリーが、その危うさに気づきながら慎重に使うなら、いかに日本のグローバル化において有効なクッション材、ないし日本と世界のあいだの「中間世界」となるかである。すなわち（1）英語に対する恐怖心は人生のごく早い段階で容易に除くことができるということ、英語に対する恐怖心は、過度の憧れや、無意味な西洋中心主義と表裏一体であること、そして英語がネックとなって劣等感にさいなまれる者が一人でも少ないことは、ある国が、世界の各地をフラットに視るために重要だということである。シンガポール人の、「外国」に対する劣等感の無さ、まるで生活必需品を買うように躊躇いなく「外国」に出たり戻ったりする態度は、言語スキルに負うところが大きい。であれば日本の英語教育を、聞き取りやすく話しやすい「アジアの英語」または「日本の英語」―アジア系言語ないし日本語のアクセントを持つ、文法的には正しい英語―の教育から始めるとよい。（2）社会の中にもとより、言語的・民族的に多様な人間が暮らしていれば、コミュニケーションを取るための手段を選んでいられない。「外国」の人と話すためでなく、自分の隣に座っている人と話すためのツールが日常的に必要であれば、一瞬一瞬がグローバル化である。そしてその隣人に、もっと「アジアの人」（「アジア」になんらかの出自や縁を持つ人。民族は問わない）がいてよい。「アジアの人」としての共通点があるのかないのかを探ることや、「西洋」に対するアンビバレントな感情を共有することから、人間としての交わりが始まるのも意義深いことなのだ。

日本の人々が「アジアとの連帯」を求めようとするとき、かつての大東亜共栄圏の負の遺産が障壁になりがちである。だが 21 世紀の現在、植民地主義的な野望を持とうにも、日本はすでにグローバル化という点で、シンガポールの後ろを行っている。奢る余地もないのならば、相手から学ぶのみである。

参照文献：

Kato, Etsuko. Asianisms in motion: Asian selves and customized Asia among Japanese sojourners in the Pacific West and East. *Asian Anthropology* (RAAN). Article ID: RAAN 1789308 (in printing)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 加藤恵津子	４．巻 45
２．論文標題 個人化される「方法としてのアジア」：シンガポールの日本人、そしてシンガポール人は「アジア人」か	５．発行年 2019年
３．雑誌名 アジア文化研究	６．最初と最後の頁 45-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Kato, Etsuko	４．巻 20
２．論文標題 Asianisms in motion: Asian selves and customized Asia among Japanese sojourners in the Pacific West and East	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Asian Anthropology	６．最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 加藤恵津子
２．発表標題 「方法としてのアジア」再考：シンガポールは、若い日本人移動者とその研究者に何を教えるか？
３．学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kato, Etsuko
２．発表標題 Asianisms in Motion: Japanese Migrants (Re-) encountering Asian Self in the Pacific West and East
３．学会等名 Asian Studies Association of Australia（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Etsuko Kato
２．発表標題 Re-encountering Asian Self: Asia as Site, Practice and Discourse for Japanese Migrants in Singapore
３．学会等名 East Asian Anthropological Association Annual Meeting 2017 (at Chinese University in Hong Kong)（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Etsuko Kato
２．発表標題 East Meets West, then East: Asia as Practice, Site and Discourse for Self-searching Japanese Migrants in English-speaking Asia?
３．学会等名 Hokudai Modern Japanese Studies Program Seminar （於　北海道大学）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 加藤恵津子
２．発表標題 <グローバル人材>言説のマッチョイズム：<男>ではない人々のアジア太平洋への移動
３．学会等名 国際基督教大学ジェンダー研究センター主催ワークショップ「移動するジェンダー/セクシュアリティ：アジア太平洋に『多様な性』の居場所はあるか」
４．発表年 2018年

１．発表者名 加藤恵津子
２．発表標題 Where Japanese/Asian/Western Selves Meet:English-speaking Asia and Self-searching Migrants from Japan
３．学会等名 シンガポール国立大学日本学科Japanese Studies Seminar（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 Kato, Etsuko
２．発表標題 Imagined “Asian” Solidarities in a Global City-State: Asianism of Japanese Migrant Workers in Singapore
３．学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES) Inter-Congress in Poznan, Poland（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考